

「急」世主 救「西」主 G線上のアリヤリヤ！その3

■新編集講座 ウェブ版 第148号 2020/5/15

毎日新聞社 制作技術本部長（元・大阪本社編集制作センター室長） 三宅 直人

新型コロナの影響で、プロ野球開幕が遅れています。そこで昔の野球紙面を紹介し、しばし楽しんでいただくことにしました。題材にしたのは、大阪本社整理部（現・編集制作センター）の大先輩、故・高山武久さん＝写真①、2016年死去＝が、自作の面白見出しを集めた著書「G線上のアリヤリヤ！」です＝図②。前にも取り上げたことがあります＝新編集講座54、55号、40年近く前の紙面なのはご容赦を。

■ 西武戦線異状あり

高山さんは1966年入社。82年に大阪整理部のスポーツ面担当デスクになりました。紙面の魅力を高めるため「見出しはパロディー調で行こう」と決めたそうです。正確さが必要な政治面や経済面と違い、多少の遊びはありだろう、「阪神勝った」「巨人負けた」式の正攻法の表現では変化に乏しい、と考えたのでした。

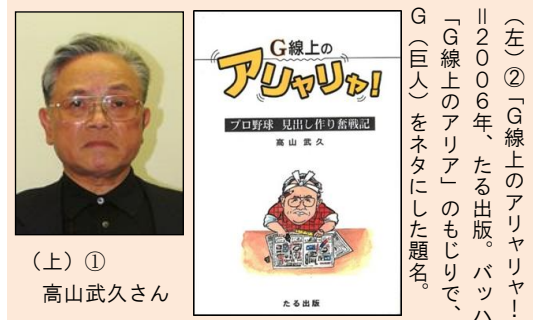
ここでは、この年のパ・リーグを取り上げます。当時のパは、前期と後期の2シーズン制でした。首位西武が3連敗と変調で、2位の阪急（現オリックス）が1.5ゲーム差に迫りました。見出しは「西武戦線異状あり」「阪急特急止まらない」＝図③（新編集講座54号でも紹介）。前者は、ドイツの作家・レマルクの小説「西部戦線異状なし」のパロディー。後者は「阪急＝私鉄」の連想で、「止まらない」から「特急」。いずれも分かりやすい見出しです。

■ Vの灯どころかシリに火

その後、阪急と差を広げ、前期優勝の灯が見えた西武ですが、またもや3連敗。阪急に1ゲーム差に迫られ、見出しは「Vの灯どころかシリに火」と、だじゃれで表しました＝図④。ちなみに西武が負けたのは南海（現ソフトバンク）。阪急に南海、それに近鉄（現オリックス）と、パの球団は激変しています＝右欄参照。

その翌日、西武はダブルヘッダーで連勝し連敗から脱出しましたが、阪急も白星を挙げて追いつぎます。見出しは「接パ1.5差」＝図⑤。文字通り、切羽（接パ）詰まった戦いです。

それにしても、こんな表現はどこから出てくるのでしょうか。高山さんは先輩から「苦しんで作ったのでは、良い見出しはできない。頭の中で、いろいろな要素が一瞬にして凝縮して流れ出るようにならなくては」と言われたそうですが、同時に「なかなかそうもいかない」とこぼしていました。



（上）① 高山武久さん

（左）②「G線上のアリヤリヤ！」
112006年、たる出版。パッハ
「G線上のアリア」のもじりで、
G（巨人）をネタにした題名。



（上）③1982年5月29日 毎日朝刊スポーツ面（大阪本社版）＝以下同、④以降は掲載日のみ記載



（上）④1982年6月6日 （下）⑤同7日



■ 阪急ひりひり タカのツメ

西武を追う2位・阪急は0.5ゲーム差まで迫りましたが、5位の南海に痛い黒星。一方の西武も最下位・ロッテに苦杯を喫する共倒れ。そこで見出しは「上位討ち」=図⑥。もちろんこれは、武家社会の「上意討ち」（主君の命を受けて罪人を討つ意）のパロディーです=右欄参照。首位と2位のチームの相手はそれより下位なので、「上位討ち」は当たり前と言え当たり前ですが。

その翌日、西武はロッテに雪辱しましたが、阪急は南海に痛い連敗。見出しは「阪急ひりひり タカのツメ」です=図⑦。南海はホークスだから「タカ」。攻撃を「爪」に例えて「タカノツメ」。唐辛子の一種で激辛だから「阪急ひりひり」というわけです。

南海、ダイエー、ソフトバンクでは「タカ笑い」や「見タカ」など「タカ」で遊んだ見出しは多いですが、その仲間ですね。

■ 手負い牛にけられ

西武と阪急のデッドヒートは続きます。1週間ほど後の試合で、阪急は巨人から移籍した藤城投手が見事な投球で南海を完封。西武はエース・東尾投手が踏ん張ってロッテ相手に完投勝利を収めました。見出しは、投手2人を各チームの「救世主」に見立て、「『急』世主」「救『西』主」としゃれました=図⑧。高山さんは「安易な言葉遊び」と謙遜しつつ、「『急』と『西』で両チームをイメージしてもらえ」と自信を見せています。

阪急はその後、西武を抜き首位に立ったこともありましたが、西武が首位を奪回。阪急は、ここ一番の近鉄戦で投手陣が崩れ、痛い敗戦を喫します。見出しは「手負い牛にけられ」=図⑨。近鉄はバッファローズ（野牛）だから「牛」は分かるとして、なぜ「手負い」なのか不明です。言葉の勢いなのでしょうね。

■ 風雲「急」に味方せず

もつれにもつれた西武と阪急の戦いも、決着の時が来ました。直接対決の一番は、西武が猛打で阪急を撃破。「西武勝ちどき」「勇者（※）刀折れ矢尽きた」と、「全体的に戦国時代をイメージした見出し構成」（高山さん）で結果を伝えました=図⑩。

※ 阪急はブレーブス（勇者）という注も必要でしょうね。

ちなみにこの試合は、強風注意報発令中のゲームでした。だから「風雲『急』に味方せず」。「風雲急を告げる」という慣用句と、阪急の略称「急」を重ねた見出しも登場したわけです。

翌々日、西武の前期優勝が決まりました。高山さんは、Vこそ逃したものの健闘した地元チーム・阪急をたたえ、「阪急破れて賛歌あり」という見出しを付けました。「敗れて」でなく「破れて」、「賛歌」という音の響きから分かるように、中国・唐の詩人、杜甫の「国破れて山河あり」（春望）のパロディーです。



(上) ⑥1982年6月10日
(下) ⑦同11日



⑧ 82年6月18日



⑨ 同22日



⑩ 同24日